

断りストラテジーの広東語とプトンファの方言差研究

——親疎関係と上下関係による配慮の視点から——

阮 振恒

Abstract

This study aims to investigate differences between Cantonese Chinese and Mandarin Chinese when refusing requests and invitations from interlocutors with different levels of intimacy and positions in social status. For this study, first a Discourse Completion Task (DCT) was conducted, and second data from 57 CNSs (Cantonese native speakers) and 57 MNSs (Mandarin native speakers) were analyzed concerning the use “semantics formulas”. Quantitative differences were found between refusals to teachers and peers. When refusing teachers, CNSs tend to give more consideration to close teachers than MNSs. When refusing peers, CNSs show less concern towards close peers and more concern towards unfamiliar peers, while MNSs show similar levels of concern regardless of the intimacy. From the above, it is concluded that CNSs and MNSs have different refusal strategies depending on the “distance” for teachers and peers.

キーワード：意味公式、断り、フェイス、ポライトネス・ストラテジー、語用論

1. 序論

1.1 「断り」の危険性

人間は社会で生活するために、他の人と交流することは不可欠なことである。より円滑なコミュニケーションを取るには、言葉の表現が大事である。我々は人と交流するとき、相手との関係などに配慮しながら、様々なストラテジーを用いている。

Brown & Levinson (1987) によると、「ポジティブ・フェイス」とは相手に評価されたい、認められたいという欲求で、「ネガティブ・フェイス」とは自由でいたい、相手に邪魔されたくないという欲求であり、人間はこの二つのフェイスを普遍的に持つ。“Face Threatening Act (以降 FTA)” は上記の2種類のフェイスを脅かすような行為である。相手に同意することなど、「ポジティブ・フェイス」を保持する「ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー (positive politeness strategy, 以降 PPS)」と、敬語使用、緩和・婉曲表現を使うことによって、「ネガティブ・フェイス」を保持する「ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー (negative politeness strategy, 以降 NPS)」の二種類のストラテジーがある。オーティー (2004:12) は、「フェイスが普遍的に見られる現象であり、すべての人が、フェイスに関して、同じような基本的関心を持っていると考える」と指摘した。

例えば、相手からの依頼や誘いを断る際に、人間関係を円滑に保つため、「断る」ための工夫を凝らす必要がある。「断り」とは相手からの行為要求に対して拒絶を表すことで、聞き手に心的負担を与える FTA 行為である。ポライトネス・ストラテジーを用いることで、相互の面子を保持することが出来、FTA を軽減することができる。依頼内容の軽重によって、また相手との上下、親疎関係によって心的負担の度合いが異なる。

「断り」表現は危険性をはらむ発話行為であり、失礼だと思われて人間関係を崩す可能性がある。特に異文化間コミュニケーションでは、言葉・文化・習慣の違いによって、さらに誤解を生じることが十分考えられる。Beebe et al. (1990) によれば、「断り」は言語学習者にとって厄介な発話行為である。聞き手にとっては聞きたくない返事なので、断る側は聞き手の気持ちを害することを回避するための高度な語用論の能力が必要である。

1.2 語用論の転移

語用論の能力とは、状況に応じて適切な言い方をする能力を指している。ジェガラッツ&ペニンソン (2004:88) によれば、異文化間コミュニケーションには、言語学習者が母語の知識を過剰一般化して、第二言語にも当てはまると考え込んでしまうこと、いわば「語用論の転移」が起こる可能性があり、人間関係に害を与える場合もある。Beebe et al. (1990:68) は、「第二言語の社会言語学知識についての知識不足は転移の原因の 1 つである」と指摘した。

「語用論の転移とは、異文化間コミュニケーションの場で生じる語用論領域の知識の転移である」と定義されている (ジェガラッツ&ペニンソン 2004:86)。「語用論の転移」は必ずしも悪い結果をもたらすわけではないが、相手に誤解されることもあり、負の語用論の転移と呼ばれている。

筆者の出身地であるマカオでの例を 1 つ挙げる。プトンファ母語話者の友達に食事に誘われて、広東語母語話者の筆者は、仲が良い友達なので詳しい理由を説明せず単に「今日は無理だね」と返答した。ところが、その友達は「行きたくないからあっさりと断るね」と誤解したことがあった。個人差を勘案しながらも、このような広東語話者とプトンファ話者の語用論の使用差異を探るのが本研究の目的である。

1.3 広東語とプトンファ

広東語と標準中国語 (プトンファ) も豊富な歴史を持つ言語で、母語話者が多い。Ethnologue (2019) によると、広東語母語話者 (Cantonese native speaker, 以降 CNS) は凡そ 7310 万人いて、プトンファ母語話者 (Mandarin native speaker, 以降 MNS) は凡そ 9.2 億人いる。広東語は主に中国の南にある広東省、香港、マカオで使われている一方、中国の標準語であるプトンファは大部分の中国大陆出身者の日常言語として使われている。広東語とプトンファには異なる発音と声調がある上に、南中国と北中国の地理、天気、交通、食べ物等の差異も大きい (卢・刘 2008)。その為、語彙はもちろん、好まれる言語表現も異なっていると予想できる。

香港は 1997 年に、マカオは 1999 年に中国に返還された。歴史的背景を考えると、中国の標準語 (プトンファ) の影響は、香港とマカオではさほど大きくないと考えられる。郑 (1998) によると、1949 年以降、プトンファは中国大陆の一部である広東省の広州に広がり、威信性が

高い言語として広州に多く影響を及ぼしている。繁体字を使い続けている特別行政区である香港とマカオは、中国大陸の中で最も地理的に近い広東地域の文化と類似点はあるが、決して同じではない。

Groves (2010) は、ベルの社会言語的類型学 (Bell's sociolinguistic typology) の7つの基準 (Standardization, Vitality, Historicity, Autonomy, Reduction, Mixture and De facto norms.) を用いて、香港で広東語の意識調査をした。結果として、広東語は基準の7つの中の4つ (Vitality, Historicity, Mixture and De facto norms) を満たしていて、標準語と方言のちょうど真ん中の位置にある。単なる一方言ではなく、広東語はプトンファとの違いが多く、相互に理解できないため、対照研究の重要性が提起された。また、被験者の意識調査によると、中国大陸出身の広東語話者は香港人より、広東語を標準語だと思っている人が多い。マカオ出身の筆者にとっては想定外の結果であった。また、多くの香港人は自分は標準的な広東語使用者であるが、広東語は方言に過ぎず、プトンファが標準語だと考えている。これは香港人がプトンファの重要性和地位を認めている裏付けだと考えられる。

しかし広東語にも地域差がある。同じ広東省出身者でも、地域により音調と語彙にかなりの違いがある。また、香港の文化に強い影響を受けているマカオ人の広東語は、香港人の広東語に極めて近いと言える。国際化が進んでいる現在、都会であるマカオ及び香港出身の CNS は中国大陸出身の MNS との接触する機会が非常に多いのである。現実問題として、広東語ができる MNS は少ないため、CNS はプトンファを介して MNS とコミュニケーションを取ることが多い。しかし残念なことに、CNS と MNS は交流できるが、言語の壁が厳然と存在している。CNS と MNS がお互いの言語特有の語用論を理解できれば、より良い人間関係を築けるはずである。

1.4 先行研究

1.4.1 DCT 調査を用いる先行研究

Beebe et al. (1990) では、日本人英語学習者 (Japanese learners of English, 以下 JE) に焦点を当てて、日本語母語話者 (Japanese native speakers, 以下 JJ) および英語母語話者 (American native speakers of English, 以下 AE) と断り表現を比較した。JE, JJ と AE, それぞれ 20 人、合計 60 人の被験者対象に、中間言語語用論 (interlanguage pragmatics) や発話行為 (speech act) の分野で広く使われている談話完成タスク (Discourse Completion Task, 以下 DCT) による調査を行った。依頼・招待・オファー状況をそれぞれ3種類設定したタスクを作成して、「意味公式」の順序・頻度・内容の3領域に焦点を当てた研究を行った。その結果、3領域すべてにおいて3群間に差が観察された。JE や JJ は断る相手よりステータスが高い場合、謝罪や後悔の表現が省略される傾向があった。また、JJ と JE では、自分より目上の人物への断りの場合、JJ の 95% と JE の 85% が謝罪・後悔を使用する頻度が高いが、AE はその頻度が低かった (40%)。断る際、日本人は対話者との上下関係に敏感であるのに対し、アメリカ人は上下関係より、対話者と同じステータスであるかどうかに関心があることが判明した。Beebe et al. (1990) は先駆的な研究であり、「意味公式」を用いて分析を行う「断り表現」対象の先行研究は概ね、この調査の意味公式を参考にしている。

断り表現を対象とした研究では、「意味公式」でデータを分類し、親疎関係・上下関係・FTA

行為を変数にした DCT 調査が多く見られる。日本語と英語の対照研究として、生駒・志村 (1993) と Yotsuya (2018) 等が挙げられる。生駒・志村 (1993:42) は、「発話行為上の誤りは、人格上の欠点とみなすことになりやすく、誤解を招きやすい」と指摘した。日本語と英語の母語話者、アメリカ人日本語学習者、それぞれ 10 人の研究協力者対象に、Beebe et al. (1990) の用いた「DCT 調査」、「意味公式」の分析方法を援用することで、英語から日本語への語用論の転移を確認した。一方で Yotsuya (2018) は、Beebe et al. (1990) と蒙 (2008, 2010) による意味公式を援用して、日本の会社で働いている 55 人の日本人社員の日本語と、55 人のアメリカ人社員の英語における断り表現の違いを調査した。「意味公式」を「PPS」と「NPS」に分類し、さらに「理由」を「曖昧な理由」と「詳細な理由」、「代案」を「曖昧な代案」と「詳細な代案」に分けた詳細な分析を行った。日本人会社員とアメリカ人会社員は意味公式の使用上、似ているパターンが見られたものの、日本人は直接的に断ることが多く、英語話者は empathy (I'd love to...) を使うのが多かった。また、日本人が「曖昧な理由」の使用を好むのに対し、アメリカ人が「詳細な理由」を好むことなどが判明した。

このように先行研究では、日本語話者と英語話者の断り表現は異なる特徴が見られた。また、言語学習者は自分の母語の影響を受け、語用論の転移が起こり母語話者に違和感を覚えさせることがあることもはっきりした。

他言語間対象の研究に目を向けると、プトンファと日本語の対照研究として蒙 (2008, 2010)、李 (2013) が挙げられる。蒙 (2008, 2010) は、Beebe et al. (1990) の意味公式を参考にした伊藤 (2003) の意味公式に基づいて、DCT 質問紙調査を行った。蒙 (2008) は親疎関係や依頼内容の軽重に焦点を当て、日本人会社員 49 人、日本にいる中国人留学生 107 人と中国人会社員 59 人対象に、依頼の断り時におけるポライトネス、ストラテジーの違いを、意味公式を用いて、量的に分析した。中国人日本語上級学習者のポライトネスの表現方法に、母語の社会文化的規範がどのような点で転移されているのを誤用論的側面から具体的にデータ分析を行った。その結果、意味公式である「理由」「詫び」「代案」「躊躇い・相槌」に関して、日本語学習者は日本人、中国人より多く使用する傾向が見られた。日本語学習者の日本語は中間言語の独自性が見られた。また蒙 (2010) は、49 人の日本人会社員と 59 人の中国人会社員を対象に、依頼に対する断りの場面を上下関係、親疎関係という社会的変数を組み合わせた断り場面において、使用頻度が高い意味公式の日中間の類似点と相違点を質的に観察した。中国人は日本人に比べて、上下関係より、親疎関係の方を重要視し、また、断る際に、相手に敬意を表すため、呼称や具体的な理由を頻用し、積極的な代案を示す特徴が判明した。

李 (2013) は、110 人の日本語母語話者 (JJ)、118 人の中国人非日本語学習者 (CC)、80 人の中国国内にいる日本語学習者 (CCJ)、90 人の日本在住中国人留学生 (CJ) を対象にして、依頼と勧誘の断り表現を分析した。上下関係、親疎関係を変数にし、DCT 調査を行った。また、調査の中で現れた疑問点についてはフォローアップ・インタビューも行った。Beebe et al. (1990)、生駒・志村 (1993)、伊藤 (2003) の「意味公式」を改良し、Brown & Levinson (1987) のフェイス理論を拡張援用して、各意味公式を話し手と聞き手のいずれかまたは両方のフェイスを守るための方略であると仮定した。最初に用いられた意味公式の出現回数とすべての意味公式の出現回数を四つの場面 (目上・依頼、目上・勧誘、同輩・依頼、同輩・勧誘) 別にデータを分

析し、それぞれの場面で、親疎関係が影響に与えるかどうかを調べた。また、接続助詞、副詞、中途終了文などの表現形式からみた配慮表現について、日本語学習者と日本語母語話者を比較対象にして、学習者の断り表現不足な部分を明らかにした。意味公式の部分で、JJはどの場面でも親疎関係と上下関係に関わらず謝罪するのが一般的で、相手のポジティブ・フェイスに対する丁寧さが見られた。一方、CCは目上からの依頼場面のみ詫びることを優先したり、まず共感を示したり、理由を説明することを優先するなどの違いがあった。CCJとCJも特に親しくない同輩に共感を過剰使用していて、日本語母語話者が多用している「二度目の詫び」が少ないことや親しい同輩からの勧誘において、CCJでもCJでも「次回への約束」において母語からの語用論の転移が見られることなどの発見があった。

次に、日本語、日本人を対象にした研究には清水、石田、岸江（2011）があげられる。清水、石田、岸江（2011）は上下関係、地域差（東日本と西日本）及び被験者の性差を対象として、国内大学生からDCT調査データを収集した。有効回答が704名から得られた。蒙（2010）の意味公式の分類を参考にして、「詫び」「理由説明」「断りの明示」「代案の提示」「共感」という5つの意味公式に基づき分析を行った。意味公式と被験者属性（東日本男性、東日本女性、西日本男性、西日本女性）の対応分析を行って、西日本の男性は後輩に対して「断りの明示」の使用率が顕著に高く、「無理」をよく用いることや東日本の女性が先輩に対して、「代案の提示」や「共感」の使用率が高く、男性より多彩な断り方を用いるとの特徴が明らかになった。日本人の断り方は上下関係に強く影響され、地域差と男女差もみられた。小さな島国である日本でも、このような地域差があることが判明した。

英語学習者に関する断り表現の先行研究には次のようなものがある。Farnia and Wu(2012)は、英語を第二言語とするマレーシア在住の36人の中国人留学生と38人のマレーシア大学生を対象として、上下関係による英語における依頼の断り表現の差をDCT手法で調査した。Beebe et al. (1990)の意味公式を参考にして、中国人とマレーシア人の断りストラテジーを量的、質的に分析し、発話行為セットの相違点を考察した。更に、アンケートに回答者の知覚(cognition)、考える時の言語の使用(language of thought)、相手からの執拗さの感覚(perception of insistence)も分析し、英語を第二言語として学習している中国人とマレーシア人は、英語で断る際に似通ったストラテジーを用いているものの、マレーシア人は中国人より言葉遣いを重視していて、返答が長かった。また、半数の中国人は相手からの執拗さを予期しているのに対し、大部分のマレーシア人は相手からの執拗さを予期しない文化的な違いが見出された。ASMALI (2013)は、トルコ・ラトビア・ポーランド英語非母語話者各15人を対象として、断り表現の対照研究を行なった結果、好ましい意味公式のタイプと数に3群間差がないのを報告している。

1.4.2 DCT以外の調査方法を用いる先行研究

断り表現に関する先行研究ではDCT調査以外、ロールプレイおよび自然談話（テレビ番組）の収集方法も採られてきた。例えばハヤティ（2018）は、日本語母語話者とスンダ母語話者、それぞれ30組の「2回目の断り」を調査するのに、オープンロールプレイ方法を用いた。これは実生活の中で、人は一度断わられても再依頼をすることが多い実体験に基づいた研究であった。分析の結果、1回だけの断りデータより、2回断りを行うデータ数の方が遥かに多かった。

両言語の個別意味公式の使用頻度に差がない理由として、スンダ語と日本語における類似した待遇表現体系が挙げられている。しかし、「2回目の断り」の冒頭発話の意味公式に関しては、日本語母語話者では「不可」と「謝罪」が最も多い一方で、スンダ母語話者では「理由」が最も多く、各言語特有の特徴も観察された。このロールプレイ手法に関して、キャスパー(2004:147)は、「2回目の断り」のようなインタラクションの性質を見る調査に適していると主張している。その一方で、調査目的が言語ストラテジーの場合は、言語産出アンケートが効果的な収集方法であるとも主張している。研究目的によりデータ収集手法の検討が慎重になされるべきであることが伺える。

Ren(2016)は中国の恋愛番組で、男性からデートに誘われた際の女性の断りデータを収集した。結果として、中国の女性は断る時、断り方の種類が限られていて、間接的な断り方を好む。また、男性のポジティブ・フェイスに配慮を示す傾向が伺えた。しかし恋愛番組は実生活と違って、女性は自分のイメージを良く見せるため、より丁寧な言い方をし、自分の礼儀正しさを示した可能性は拭いきれない。

1.5 研究目的と研究課題

現時点で、管見の限り広東語とブトンファの断り表現に関する対照調査がほとんど見当たらない。「断る」表現における言語差が、CNS(広東語母語話者)とMNS(ブトンファ母語話者)との間に誤解を生じさせる可能性が十分考えられる。

そこで本研究では、親疎関係および上下関係が異なる相手からの依頼および勧誘を断る際に、CNSとMNSは異なる方略を用いるかどうかを探る。そうすることで、両者間のより円滑なコミュニケーションに繋げることが期待できるからである。

本研究の研究課題を以下のように設定する。

1. 先生及び同輩に断りを入れる際に、CNSとMNSにはどのような違いがあるのか。
2. 断りを入れる際に、相手との親疎関係がCNSとMNSに同じような影響を及ぼすのかどうか。

2. 研究方法

2.1 調査対象者

アンケート対象者となった(1)広東語母語話者(CNS)と(2)ブトンファ母語話者(MNS)の言語背景情報をまとめたのが表1である。

表1 対象者の言語背景一覧

	広東語母語話者(CNS)	ブトンファ母語話者(MNS)
平均年齢	20歳8ヶ月	20歳11ヶ月
性別・人数	男19人 女38人	男26人 女31人
母語	全員が広東語	全員がブトンファ
主な生育場所	マカオ	主に中国北京市と河北省
現在の居住地	マカオ	主に中国北京市と河北省

現在、日常生活で一番使っている言語あるいは方言	全員が広東語	全員がブトンファ
現在、物事を考えるときに、一番使っている言語あるいは方言	全員が広東語	全員がブトンファ
これまでの生涯で一番使っている言語あるいは方言	全員が広東語	全員がブトンファ

CNS用アンケートは、マカオ大学の教員を通し、日本研究学科1、2年生に配布した。更に、マカオ大学のFacebookページ「New UM Secrets – Backup」にも配布してデータを収集した。一方MNSアンケートは、中国の「アンケートQQ」を用い、「回答小組」と呼ばれる対象を絞り込む機能を使い、中国の大学生に配布しデータを収集した。

2.2 アンケート調査

李（2013）の「断り表現状況設定」は、依頼と勧誘をそれぞれに2場面を設定し、バランスよく上下関係と親疎関係を勘案しているため、このアンケートを少し改変して使用した。対象者の年齢および中国とマカオの大学生の日常生活を考慮し、李（2013）における断る理由の「就職活動がある」を「アルバイトがある」、誘い内容の「カラオケに誘う」を「食事に誘う」に改変した。状況設定をまとめたのが表2である。

表2 アンケートの構成

場面	相手	内容
依頼	目上・先生	研究会の受付の依頼
	同輩・クラスメート	凡そ5,000円の借金の依頼
勧誘	目上・先生	講演会の後、急な食事の誘い
	同輩・クラスメート	放課後、急な食事の誘い

アンケートで設定した4状況は以下の通りである。

[[状況1]] 今週の土曜日に、あなたの大学で研究会が開かれる。あなたは担当の先生からその研究会の受付を頼まれた。しかし、あなたは朝から晩まで、アルバイトのシフトが入っています。先生：もし、時間が空いていれば、今週の土曜日に開かれる○○研究会の受け付けを○○さん（あなた）に頼みたいと思っているが、時間のほうは大丈夫ですか？

相手：いつもお世話になっている親しい先生 あなた：

相手：あまり親しくない先生 あなた：

[[状況2]] 先生が主催する講演会があり、あなた達（3～4人）は先生に頼まれていろいろな準備をしてきた。また、講演会の当日は、受け付けや資料の配布や席の配置などお手伝いをした。講演会が無事に終わり、先生はあなた達から手伝ってもらったことに、お礼としておごるから、飲みに行こうと誘う。しかし、あなたはその晩、あいにくアルバイトが入っている。

先生：みなさん、お疲れ様でした。みなさんのおかげで講演会が無事に終わりました。講演会のことでいろいろと手伝ってもらって、本当に助かりました。お礼でごちそうしたいので、飲みに行きましょう。

相手：いつもお世話になっている親しい先生 あなた：

相手：あまり親しくない先生 あなた：

[[状況3]] あなたは大学生である。友達と同じ授業が終わった後、友達があなたに5,000円貸してほしいと頼む。あなたの財布に十分なお金が入っていますが、あなたは友達とのお金の貸し借りはできるだけ避けたい。

友達：今日はもう授業ない？

あなた：そうだよ。

友達：突然で本当に悪いんだけど、最近本当にお金に困っていて、ちょっと5,000円ぐらい貸してもらえないかな？バイト代が入ったらすぐ返すから。

相手：親しい友達 あなた：

相手：あまり親しくない友達 あなた：

[[状況4]] あなたは大学生である。放課後、家に帰っている途中で数人のクラスメートに会って、急に食事に誘われる。しかし、あなたは疲れていて、今日は家でご飯を食べたい。

友達：偶然だね！ちょうどご飯に行く途中なんだけど、一緒に行かない？

相手：親しいクラスメート あなた：

相手：あまり親しくないクラスメート あなた：

2.3 分析方法

本研究は、Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論に基づき、人が断る際に用いるストラテジーを「ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー (PPS)」と「ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー (NPS)」に分類し、また、上下関係、親疎関係のような発話行為に影響を与える社会的変数 (sociological variables) を考慮しながら分析を行う。

断り表現の先行研究は、DCT 調査を通してデータ収集するのが一般的である。また意味公式を用い、データ分析することがほとんどであるので、本研究も同じ手法を採用する。キャスパー (2004:152) によれば、DCT 調査とは、「注意深く作れば、ある特定のストラテジーや言語的選択が適切であるかどうかという、状況要因に関する話者の社会語用論的知識について情報を得るのに有効である」とされている。異なる言語を用いる CNS と MNS における断り方の相違点を比較できるデータの収集は、DCT 調査が相応しいと考えられる。

先行研究が用いている「意味公式」はほとんど、Beebe et al. (1990) の分類を参考にし、改良したものを採用している。しかしながら、話し手は断るとき、相手のフェイスだけではなく、自分のフェイスも守りたいと考えられるため、本研究は改良された李 (2013) の話し手と聞き手のいずれかまたは両方のフェイスを考慮した意味公式を用いる。また、筆者は「関係維持」という意味公式を再定義し用いた (全公式分類が表3)。例えば、以下のような発話行為は発話者が相手との関係を維持したいための積極的な働きかけと見なして「関係維持」に分類した。

- ・感謝 例：誘ってくれてありがとうございます (万分感谢老师邀请我参加)
- ・共感 例：とても残念です (太遺憾了)・行きたいですが (想去)・楽しんでください (玩得开心)・先生を手伝うのは当然のこと (帮助老师应该的)・感謝は大丈夫です (不用感谢我啦)
- ・冗談 例：(友達の借金返済) 卒業以降まで待たないといけない？ (等你毕业以后去打工吗?)

・質問 例：お金を借りて何をする？（你要这么多钱干啥？）

本研究で用いる意味公式の分類は以下の通りである（表 3）：

（S：話し手，H：聞き手，PF：ポジティブ・フェイス，NF：ネガティブ・フェイス）

表 3 意味公式の分類

意味公式	意味機能		日本語例	ブトンファ例
結論	直接的な表現の結論	BOR (bald on record, 配慮なし)	行けない。	没有办法去。
	緩和した表現の結論	H-PF	多分行けない。	可能去不了。
理由説明	よんどころない理由	S/H-PF	その日にアルバイトがある。	我那天有兼职。
	明確だが個人的な理由	S-PF	私は本当に人とお金の貸し借りをするのが好きじゃない。	朋友借钱伤感情, 不好借。
	不明確な理由	S-NF	私は少し忙しいので。	我有点忙。
詫び	相手の意向に添えないことを負担に感じている旨の表明	H-PF	本当にすみません。	真的不好意思。
次回への約束	積極的な約束	H-PF	次回は必ず手伝います。	下次有需要帮助的我一定去。
	消極的な約束	S-NF	また今度。	下次吧。
関係維持	相手との関係を維持したい旨の積極的な働きかけ	H-PF	* 例文は表の上の本文中を参照。	* 例文は表の上の本文中を参照。
代案提示	自分から働きかける	H-PF	私がお金に聞けます。	我可以帮你问问其他人。
	自分は回避する	S-NF	他の人に当たって見たらどうですか？	您看看能不能找其他人去帮忙。
条件提示	ある条件さえ満たせばできる可能性が高い	H-PF	私はその日に時間があるかどうか知らないです。時間があつたら絶対行きます。	目前我不知道我那天有没有时间，如果有的话我一定去。
	断りの保留	S-NF	行けるかどうか知らないです。	不知道能不能去。
断らない	断らない	FTA しない	断らない。	不拒绝。

また、意味公式の分類例は以下の表 4 の通りである。

表 4 意味公式の分類例

ブトンファ	老师, 真的不好意思,	我那天可能去不了,	因为我有一个兼职要去。
日本語	先生, 本当にすみません,	その日は多分行けなくて,	アルバイトがあるので。
意味公式	詫び	緩和した結論	よんどころない理由

3. 結果

ここでは、意味公式の頻度比較とポライトネス・ストラテジーの頻度比較の観点から結果を記載する。

3.1 先生からの依頼

3.1.1 意味公式の頻度比較

先生からの依頼場面における、全意味公式の使用回数及びその割合をまとめたのが図1である。

広東語とプトンファ両言語共に、「直接的な結論 BOR」、「よんどころない理由 S/H-PF」、「不明確な理由 S-NF」と「詫び H-PF」の出現頻度が高いことが記述統計からわかるが、更にカイ二乗検定により、CNSとMNSの各データに統計的差があるかどうかを順に検証する。

帰無仮説1：CNSは親疎で意味公式に変化がない。合計の部分には有意差があり ($p<0.01$)、帰無仮説1が棄却され、CNSは先生からの依頼場面において、意味公式の使用が親疎関係によって異なると判明した。

帰無仮説2：MNSは親疎で意味公式に変化がない。合計の部分には有意差があり ($p<0.05$)、帰無仮説2が棄却され、MNSは先生からの依頼の場面において、意味公式の使用が親疎関係によって異なると判明した。

帰無仮説3：親しい先生に対して、CNSとMNSの意味公式に変化がない。合計の部分には有意差があり ($p<0.05$)、帰無仮説3が棄却され、親しい先生の依頼に対して、CNSとMNSの意味公式の使用の差があると判明した。

帰無仮説4：親しくない先生に対して、CNSとMNSの意味公式の使用に変化がない。合計の部分には有意差がないので ($p>0.05$)、帰無仮説4が棄却できない。つまり、親しくない先生の依頼に対して、CNSとMNSの意味公式の使用の差がないと判明した。

実際に収集したアンケート内容を上記検定結果に当てはめてまとめると、以下ようになる。

1. CNSもMNSも、親しい先生には、「よんどころない理由」(例：アルバイトがある)が多く、「不明確な理由」(例：時間がない)が少ない。親しい先生だからこそ、明確な理由で断るほうが、失礼にならず、自分と先生の両方のポジティブ・フェイスを守ることができる。
2. 親しい先生には、CNSはMNSより「よんどころない理由」を多用するが、「不明確な理由」は少なく使う有意傾向がある。「理由」の使用について、CNSはMNSより、親しい先生への配慮が高い。
3. 親しい先生の依頼を断る際に、CNSは「積極的な約束」(例：次回必ず手伝う)を使う傾向があり、MNSは「積極的な代案提示」(例：私が他の人を探します)と「関係維持」(例：誘ってくれてありがとうございます)を使う傾向がある。CNSとMNSは親しい先生への配慮の方法が異なる。
4. MNSはCNSより、親しくない先生に「緩和した結論」(例：多分行けない)を多く使う。「結論」の使用について、MNSはCNSより親しくない先生への配慮が高い。
5. 仮説4以外の3つの仮説も、有意差が確認された。CNSとMNSの意味公式使用は親疎関係によって差があるのに加えて、親しい先生に対しては言語間差がある。

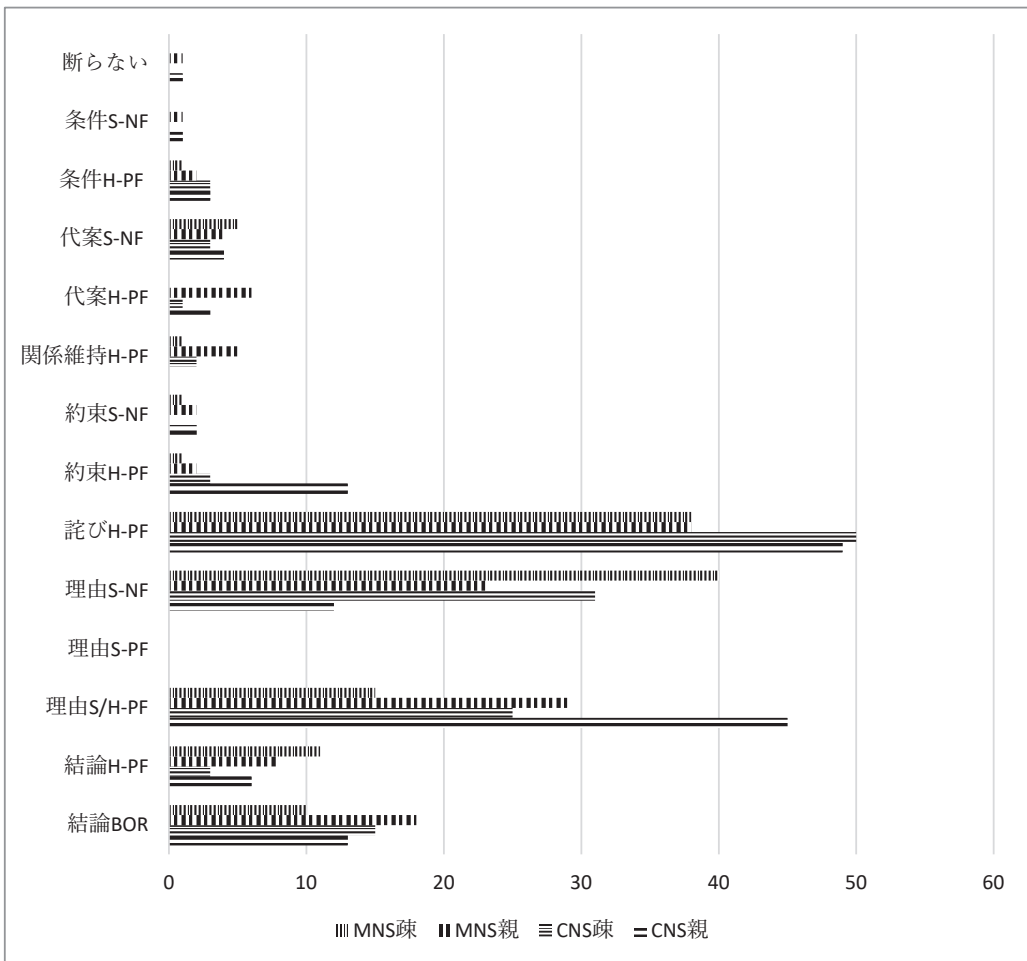


図 1 先生からの依頼・意味公式構成

3.1.2 ポライトネス・ストラテジーの使用頻度比較

先生からの依頼に対する回答をまとめたのが表5である。カイ二乗検定により、CNS 親と CNS 疎 ($\chi^2(2) = 10.91, p < 0.01$), MNS 親と MNS 疎 ($\chi^2(2) = 9.66, p < 0.01$), CNS 親と MNS 親 ($\chi^2(2) = 6.54, p < 0.05$), CNS 疎と MNS 疎 ($\chi^2(2) = 5.74, p > 0.05$) という結果が得られた (表5)。「CNS 疎と MNS 疎」のグループ間には有意傾向はあるものの有意差がなく、他の3グループ間には有意差が確認された。概ね、CNSとMNSのポライトネス・ストラテジー使用には親疎関係による差がある。つまり、親しい先生に対して先生と自分のポジティブ・フェイスをより配慮するが、親しくない先生に対しては自分のネガティブ・フェイスをより配慮する共通傾向がCNSとMNSにみられるが、親しい先生のポジティブ・フェイスへの配慮がCNSの方がMNSより高い傾向がある。

表5 先生からの依頼・ポライトネス・ストラテジー構成

			言語				
			CNS 親	CNS 疎	MNS 親	MNS 疎	合計
ストラテジー	H-PF	度数	119	87	90	67	363
		ストラテジー の %	32.8%	24.0%	24.8%	18.5%	100.0%
	S-PF	度数	45	25	29	15	114
		ストラテジー の %	39.5%	21.9%	25.4%	13.2%	100.0%
	S-NF	度数	19	34	30	46	129
		ストラテジー の %	14.7%	26.4%	23.3%	35.7%	100.0%
合計	度数	183	146	149	128	606	
	ストラテジー の %	30.2%	24.1%	24.6%	21.1%	100.0%	

3.2 先生からの勧誘

3.2.1 意味公式の頻度比較

先生からの勧誘場面における、全意味公式の使用回数及びその割合をまとめたのが図2である。

広東語とプトンファ両言語共に、「直接的な結論 BOR」,「よんどころない理由 S/H-PF」,「不明確な理由 S-NF」,「詫び H-PF」と「関係維持 H-PF」の出現頻度が高いように記述統計からは窺えるが、カイ二乗検定により、CNSとMNSの各データに統計的差があるかどうかを検証する。

帰無仮説1：CNSは親疎で意味公式に変化がない。合計の部分には有意差があり ($p<0.01$)、帰無仮説1が棄却され、CNSは先生からの勧誘場面において、意味公式の使用が親疎関係によって異なると判明した。

帰無仮説2：MNSは親疎で意味公式に変化がない。合計の部分には有意差があり ($p<0.05$)、帰無仮説2が棄却され、MNSは先生からの勧誘場面において、意味公式の使用が親疎関係によって異なると判明した。

帰無仮説3：親しい先生に対して、CNSとMNSの意味公式に変化がない。合計の部分には有意差がないので ($p>0.05$)、帰無仮説3が棄却できず、親しい先生の勧誘に対して、CNSとMNSの意味公式の使用の差がないと判明した。

帰無仮説4：親しくない先生に対して、CNSとMNSの意味公式の使用に変化がない。合計の部分には有意差がないので ($p>0.05$)、帰無仮説4が棄却できず、親しくない先生の勧誘に対して、CNSとMNSの意味公式の使用の差がないと判明した。

実際に収集したアンケート内容を上記検定結果に当てはめてまとめると、以下のようになる。

1. CNSもMNSも、親しい先生には「よんどころない理由」(例：アルバイトがある)が多く、「不明確な理由」(例：時間がない)が少ない。「理由」の使用について、CNSもMNSも親しい先生に対する配慮がより高い。
2. 親しい先生には、CNSはMNSより「よんどころない理由」をさらに多く、「不明確な理由」をさらに少なく使う。「理由」の使用について、CNSはMNSより、親しい先生への配慮が高い。
3. CNSもMNSも親しい先生より、親しくない先生への「詫び」が多い。本場面の設定は、学生が急に先生に誘われることなので、出席できないのは学生のせいではない。親しい先生に断るとき、わざわざ詫びなくても大丈夫だと考えられるが、親しくない先生に誘

われる場合は、「詫び」をした方が、礼儀正しく感じられ、人間関係がよりよくできると考えられる。

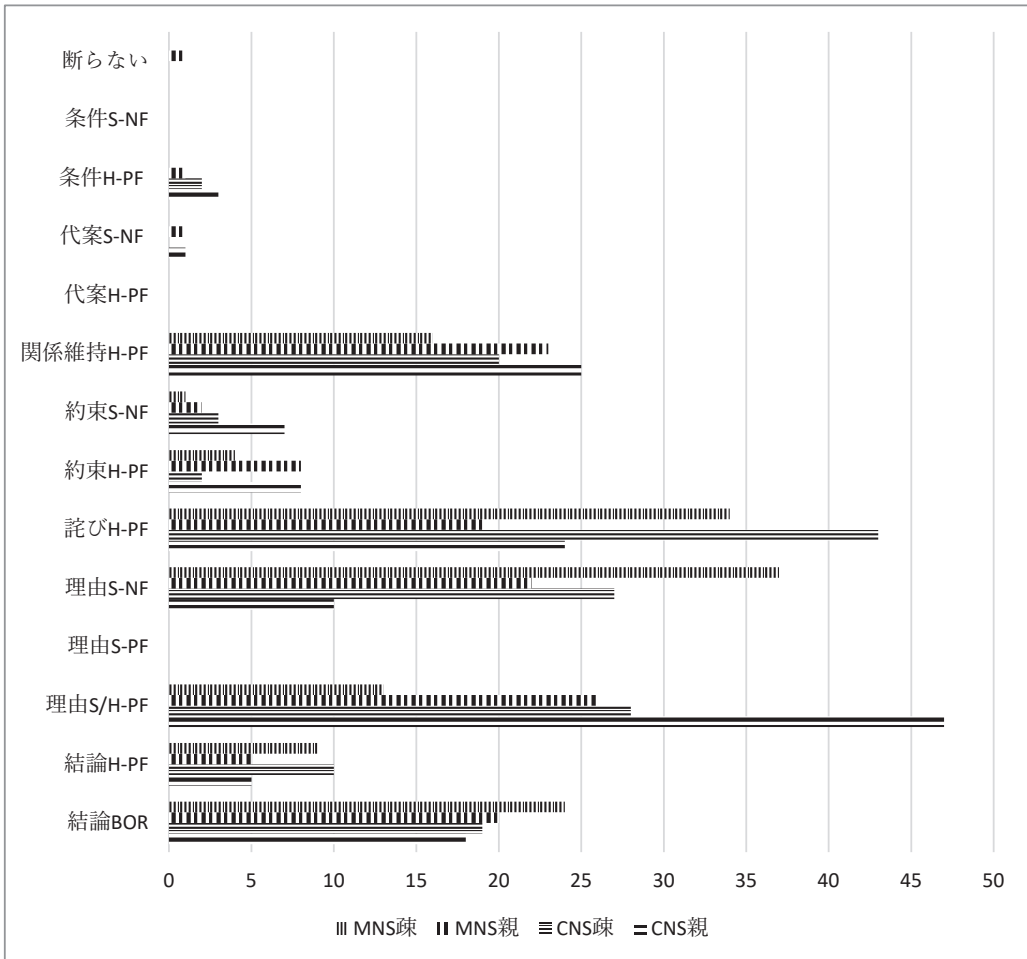


図2 先生からの勧誘・意味公式構成

3.2.2 ポライトネス・ストラテジーの使用比較

先生からの勧誘へのアンケート結果をまとめたものが、表6である。カイ二乗検定の結果、CNS親とCNS疎 ($\chi^2(2) = 7.48, p < 0.05$), MNS親とMNS疎 ($\chi^2(2) = 7.11, p < 0.05$), CNS親とMNS親 ($\chi^2(2) = 5.69, p > 0.05$), CNS疎とMNS疎 ($\chi^2(2) = 6.71, p < 0.05$) となり、「CNS親とMNS親」のみ有意傾向であり、他の3群比較では統計的有意差が確認された。場面1の結果と同じく、CNSとMNSのポライトネス・ストラテジー使用は、言語の違いと親疎関係に影響される。

場面1同様に、親しい先生に対して先生と自分のポジティブ・フェイスをより配慮するが、親しくない先生に対しては自分のネガティブ・フェイスをより配慮する同じ傾向がCNSとMNSにある。

表 6 先生からの勧誘・ポライトネス・ストラテジー構成

			言語				合計
			CNS 親	CNS 疎	MNS 親	MNS 疎	
ストラテジー	H-PF	度数	112	105	82	76	375
		ストラテジー の %	29.9%	28.0%	21.9%	20.3%	100.0%
	S-PF	度数	47	28	26	13	114
		ストラテジー の %	41.2%	24.6%	22.8%	11.4%	100.0%
	S-NF	度数	18	30	25	38	111
		ストラテジー の %	16.2%	27.0%	22.5%	34.2%	100.0%
合計	度数		177	163	133	127	600
	ストラテジー の %		29.5%	27.2%	22.2%	21.2%	100.0%

3.3 同輩からの依頼

3.3.1 意味公式の頻度比較

同輩からの依頼場面における、全意味公式の使用回数及びその割合をまとめたのが図3である。

広東語とプトンファ両言語共に、「直接的な結論 BOR」,「よんどころない理由 S/H-PF」,「不明確な理由 S-NF」,「詫び H-PF」,「関係維持 H-PF」と「消極的な代案 S-NF」の出現頻度が高いことが記述統計からわかるが、更にカイ二乗検定により、CNS と MNS の各データに統計的差があるかどうかを検証する。

帰無仮説 1：CNS は親疎で意味公式に変化がない。合計の部分には有意差があり ($p<0.01$)、帰無仮説 1 が棄却され、CNS は同輩からの依頼場面において、意味公式の使用が親疎関係によって異なると判明した。

帰無仮説 2：MNS は親疎で意味公式に変化がない。合計の部分には有意差がないので ($p>0.05$)、帰無仮説 2 を棄却できず、MNS は同輩からの依頼場面で意味公式の使用が親疎関係によって違いがないと判明した。

帰無仮説 3：親しい同輩に対して、CNS と MNS の意味公式に変化がない。合計の部分には有意差があり ($p<0.05$)、帰無仮説 3 が棄却され、親しい同輩の依頼に対して、CNS と MNS の意味公式の使用の差があると判明した。

帰無仮説 4：親しくない同輩に対して、CNS と MNS の意味公式の使用に変化がない。合計の部分には有意差があり ($p<0.05$)、帰無仮説 4 が棄却され、親しくない同輩の依頼に対して、CNS と MNS の意味公式の使用の差があると判明した。

実際に収集したアンケート内容を上記検定結果に当てはめてまとめると、以下のようになる。

1. 親しい同輩に対し、CNS は MNS より「直接的な結論」(例：貸せない)が多い。親しくない同輩に対し、CNS は MNS より「緩和した結論」(例：本当に手伝えない)が多い。本場面において、MNS はまれに「結論」を使うのに対し、CNS の使用率が相当数あった。特に、親しい同輩に対し、MNS の「直接的な結論」の使用率は 8.8% であるのに対し、CNS の使用率は 29.8% もある。CNS は MNS の同輩に断る時、「直接的な結論」を使うと、失礼だと思われる可能性がある。
2. 「CNS 疎」は「CNS 親」と「MNS 疎」より、「よんどころない理由」(例：最近たくさん買い物したから)が有意に多い傾向がある。親しくない同輩に対して、CNS は詳しい

理由を述べる傾向があり、配慮度が高い。

3. CNS も MNS も、親しい同輩には、「関係維持」（例：なんでそんなに金欠？）が多い。親しい同輩の借金の依頼を断る時、CNS も MNS も「冗談」、「質問」などの発話行為を多用し、相手との関係を維持したいという気持ちが窺える。
4. 「CNS 親」は「CNS 疎」と「MNS 親」より、「詫び」が少ない。MNS は親疎間差に詫び率の有意差がない一方で、CNS は親しい同輩に断る際に配慮しない傾向がある。つまり、CNS は親しい MNS の同輩に断る際に、「詫び」を加える必要性が示唆された。
5. 仮説 1・3・4 には有意差がある（ $p<0.05$ ）のに対し、仮説 2 には有意傾向しかない。この事より、CNS の意味公式使用は親疎関係によって変化し、MNS との差が大きい。CNS は MNS の親しい同輩に断る際に、より丁寧な言い方（「詫び」を加えるや、「直接的な結論」を避けるなど）をしたほうが、人間関係を築くのに役に立つと考えられる。また、MNS は CNS の親しくない友人に断る時、「よんどころない理由」の活用の有用性も示唆されている。

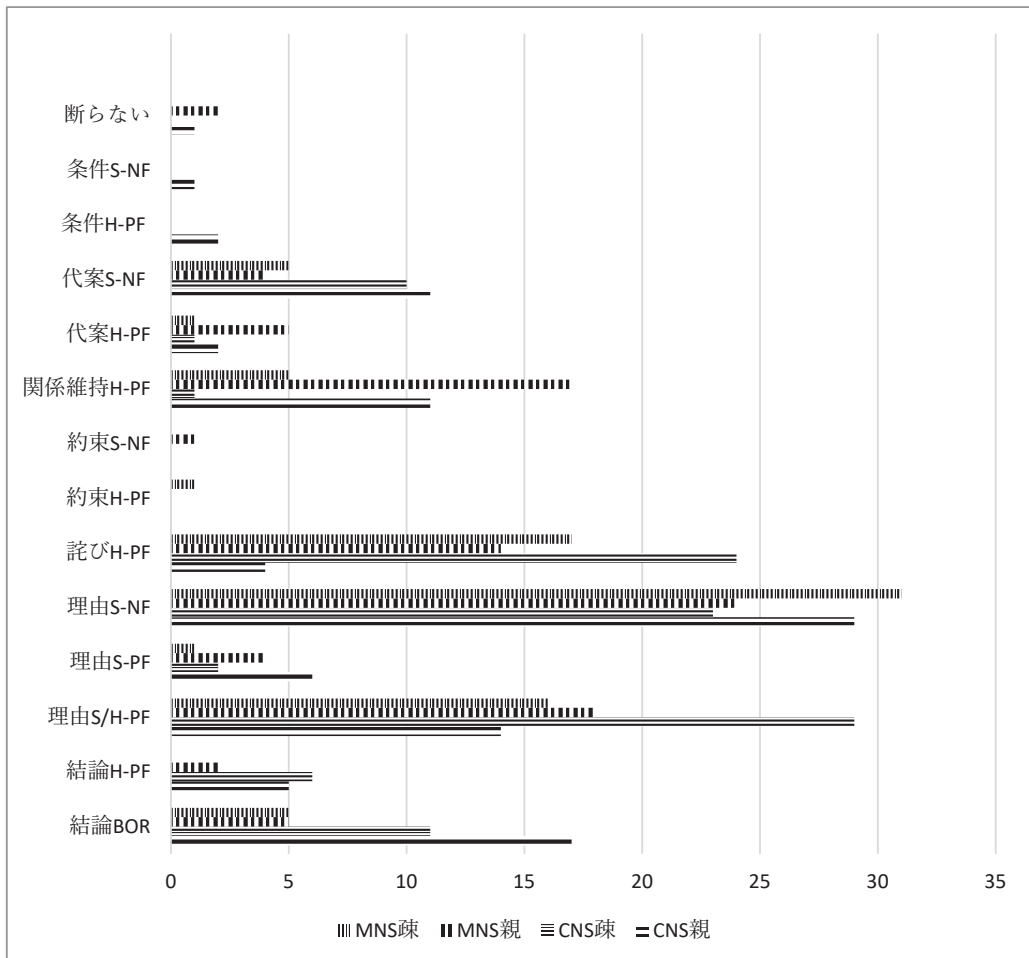


図3 同輩からの依頼・意味公式構成

3.3.2 ポライトネス・ストラテジーの使用比較

同輩からの依頼へのアンケート調査結果をまとめたのが表 7 である。カイ二乗検定の結果、CNS 親と CNS 疎 ($\chi^2(2) = 5.64, p > 0.05$), MNS 親と MNS 疎 ($\chi^2(2) = 3.10, p > 0.05$), CNS 親と MNS 親 ($\chi^2(2) = 5.30, p > 0.05$, CNS 疎と MNS 疎 ($\chi^2(2) = 3.97, p > 0.05$) となり (表 7), 全グループとも有意差がない結果であるが、「CNS 親と CNS 疎」と「CNS 親と MNS 親」グループに弱い有意傾向がある。

先生の場合と異なり、CNS は親しい同輩に対し、より自分のネガティブ・フェイスを配慮し、親しくない同輩に対し、より同輩と自分のポジティブ・フェイスを配慮する傾向がみえる。その一方、MNS は親疎関係によるポライトネス・ストラテジー使用に変化がない。

CNS は親しい先生に配慮をするが親しい同輩に配慮をしない傾向がみえる一方で、MNS は親しい先生により配慮をするが同輩の親疎関係には影響を受けない。

表 7 同輩からの依頼・ポライトネス・ストラテジー構成

			言語				
			CNS 親	CNS 疎	MNS 親	MNS 疎	合計
ストラテジー	H-PF	度数	38	61	56	40	195
		ストラテジー の %	19.5%	31.3%	28.7%	20.5%	100.0%
	S-PF	度数	20	31	22	17	90
		ストラテジー の %	22.2%	34.4%	24.4%	18.9%	100.0%
	S-NF	度数	41	33	29	36	139
		ストラテジー の %	29.5%	23.7%	20.9%	25.9%	100.0%
合計		度数	99	125	107	93	424
		ストラテジー の %	23.3%	29.5%	25.2%	21.9%	100.0%

3.4 同輩からの勧誘

3.4.1 意味公式の頻度比較

同輩からの勧誘場面における、全意味公式の使用回数および、その割合を以下の図 4 にまとめる。

広東語とブトンファ両言語共に、「直接的な結論 BOR」, 「よんどころない理由 S/H-PF」, 「不明確な理由 S-NF」, 「詫び H-PF」, 「積極的な約束 H-PF」および「消極的な約束 S-NF」の出現頻度が高いことが記述統計からわかるが、更にカイ二乗検定により、CNS と MNS の各データに統計的差があるかどうかを検証する。

帰無仮説 1: CNS は親疎で意味公式に変化がない。合計の部分には有意差があり ($p < 0.01$), 帰無仮説 1 が棄却され、CNS は同輩からの勧誘場面において、意味公式の使用が親疎関係によって異なると判明した。

帰無仮説 2: MNS は親疎で意味公式に変化がない。合計の部分には有意差がないので ($p > 0.05$), 帰無仮説 2 が棄却できない。MNS は同輩からの勧誘場面において、意味公式の使用が親疎関係によって違いがないと判明した。

帰無仮説 3: 親しい同輩に対して、CNS と MNS の意味公式に変化がない。合計の部分には有意差がないので ($p > 0.05$), 帰無仮説 3 が棄却できない。親しい同輩の勧誘に対して、CNS と

MNS の意味公式の使用の差がないと判明した。

帰無仮説 4：親しくない同輩に対して、CNS と MNS の意味公式の使用に変化がない。合計の部分には有意差がないので ($p>0.05$)、帰無仮説 4 が棄却できない。親しくない同輩の勧誘に対して、CNS と MNS の意味公式の使用の差がないと判明した。

実際に収集したアンケート内容を上記検定結果に当てはめてまとめると、以下のようになる。

1. 「CNS 疎」は「CNS 親」と「MNS 疎」より、「よんどころない理由」（例：家族がご飯を作ったから）が有意に多い。親しくない同輩に対し、CNS は詳しい理由を述べる傾向が見え、配慮度が高い。言い方を変えれば、CNS は親しい同輩への配慮がより低い。
2. CNS は親しくない同輩より、親しい同輩に「不明確な理由」（例：今日はつかれた）を多く使う。その一方、MNS は親疎関係にかかわらず、「不明確な理由」の使用率の有意差がない。CNS は親しい友人に断るからこそ、詳しい理由を述べなくてもいいという考えが窺え、配慮度が低いのにに対し、MNS はそのような傾向がない。
3. CNS は親しくない同輩より、親しい同輩に「詫び」を少なく使う。その一方、MNS は

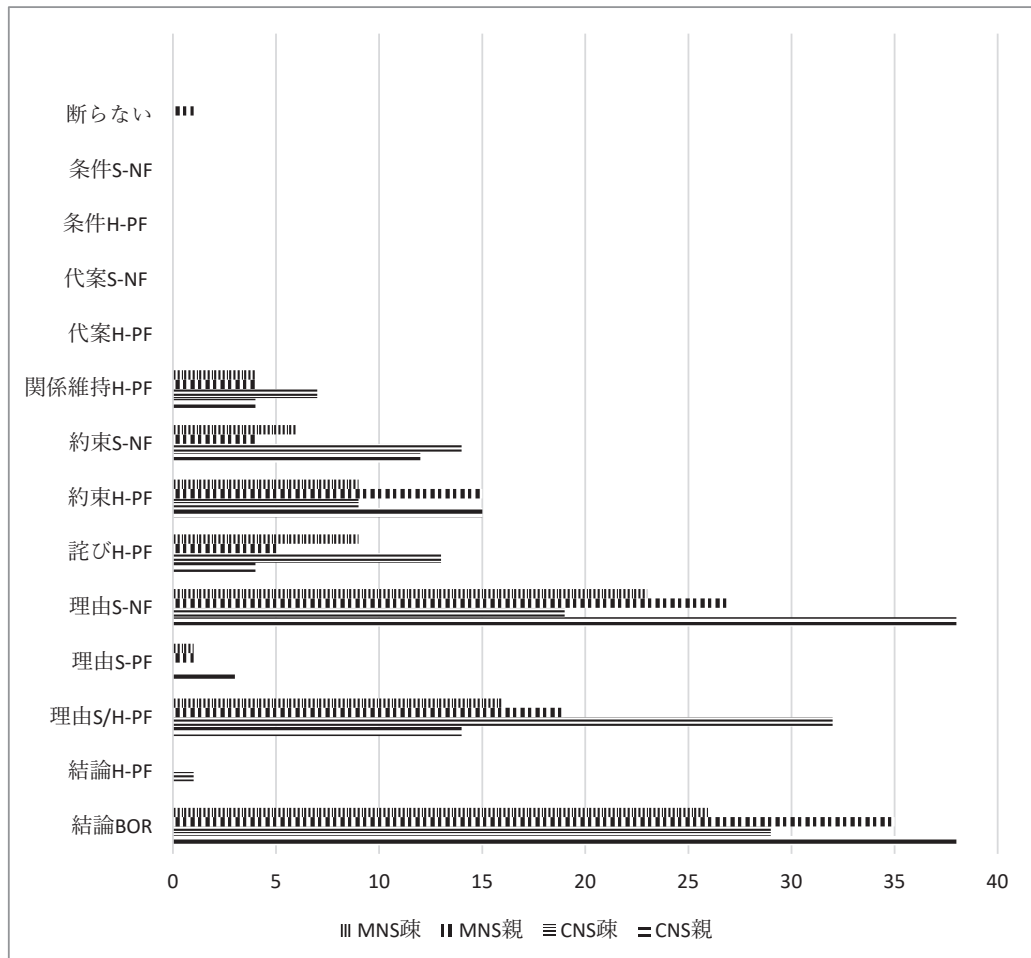


図 4 同輩からの勧誘・意味公式構成

親疎関係にかかわらず、「詫び」の使用率の有意差がない。CNSは親しい同輩に断る時、MNSより配慮しない傾向が見える。

4. CNSは親疎関係にかかわらず、「消極的な約束」(例: また今度)の使用率は、MNSより有意に多い、または多い有意傾向がある。同輩に誘われる場面に、「消極的な約束」を使うのは、CNSの文化、言語習慣の可能性はある。
5. 仮説1のみ有意差($p<0.01$)があった。CNSの意味公式使用は親疎関係によって変化が多いが、MNSのデータとの差はない。

3.4.2 ポライトネス・ストラテジーの使用比較

同輩からの勧誘データをまとめたのが表8である。カイ二乗検定の結果、CNS親とCNS疎($\chi^2(2)=12.22, p<0.01$), MNS親とMNS疎($\chi^2(2)=0.06, p>0.05$), CNS親とMNS親($\chi^2(2)=4.66, p>0.05$), CNS疎とMNS疎($\chi^2(2)=1.93, p>0.05$)となり、「CNS親とCNS疎」のみ有意差があった。場面3同様に、CNSは親しい同輩に対し、より自分のネガティブ・フェイスを配慮し、親しくない同輩に対し、より同輩と自分のポジティブ・フェイスを配慮する傾向が見える一方で、MNSは同輩の親疎関係に影響されない。CNSはMNSより親しい同輩への配慮度が低いことは、場面3と同じである。この文化的違いが、CNSとMNSの間の誤解をもたらす可能性がある。

表8 同輩からの勧誘・ポライトネス・ストラテジー構成

			言語				合計
			CNS 親	CNS 疎	MNS 親	MNS 疎	
ストラテジー	H-PF	度数	37	62	43	38	180
		ストラテジーの%	20.6%	34.4%	23.9%	21.1%	100.0%
	SPF	度数	17	32	20	17	86
		ストラテジーの%	19.8%	37.2%	23.3%	19.8%	100.0%
	SNF	度数	50	33	31	29	143
		ストラテジーの%	35.0%	23.1%	21.7%	20.3%	100.0%
合計	度数		104	127	94	84	409
	ストラテジーの%		25.4%	31.1%	23.0%	20.5%	100.0%

4. 考察

オーティー(2004:37)によると、ポライトネス・ストラテジーの使用に影響を与える要因の1つは、参加者間の関係である。重要な変数として、支配力(power)と距離(distance)がある。本稿は上下関係と親疎関係に焦点を当てて、アンケートで「親しい先生」、「親しくない先生」、「親しい同輩」、「親しくない同輩」を設定した。先生と同輩の依頼場面および勧誘場面において、CNSの広東語による「断り」とMNSのプトンファによる「断り」の比較分析を行なった。

4.1 先生の場合

地位が高く、支配力が自分より高い先生に断りを入れる時、CNSとMNSに差があるのかを

比較した。依頼場面と勧誘場面において、CNSもMNSも先生のポジティブ・フェイスを守る意味公式の「詫び H-PF」, 「よんどころない理由 S/H-PF」と、自分のネガティブ・フェイスを守る「不明確な理由 S-NF」が一番多く使われていた。この点については殆どの先行研究(蒙(2008), Yotsuya (2018) など)と一致する。断る時、言語にかかわらず、「詫び」と「理由」を用いることが一般的であると判明した。

蒙(2010)によると、日本人の断り表現はより上下関係に影響され、中国人の断りは親疎関係に影響される。李(2013)のブトンファデータ同様、本研究の依頼場面や勧誘場面においても、親疎関係によってCNSとMNSの用いる意味公式使用差が観察された。

依頼場面において、親しい先生に対し、CNSは「積極的な約束 H-PF」(例：次回必ず手伝う)を多く使い、MNSは「積極的な代案提示 H-PF」(例：私が他の人を探します)を多く使う。一方で、勧誘場面において、親しい先生に対し、CNSもMNSも「詫び H-PF」の使用は少ない。学生が急に先生に誘われるという場面なので、親しい先生への断りの際には詫びなくても大丈夫だと考えるが、親しくない先生に対しては詫びを入れた方が、礼儀正しく感じられ、人間関係を良好に保ちたいと考えられる。どちらの場面においても、親しい先生に対し、CNSもMNSも「不明確な理由 S-NF」より、「よんどころない理由 S/H-PF」の使用率が高い。つまり、CNSとMNSは親しい先生により配慮をするという共通の傾向がみえる。また、CNSはMNSより親しい先生のポジティブ・フェイスに配慮する傾向が強い。具体的には、両場面において、CNSとMNSは親しい先生に対する意味公式の使用に有意差または有意傾向があり、CNSはMNSより親しい先生に対し、「よんどころない理由 H-PF」をさらに多く使用し、「不明確な理由 S-NF」の使用は少ない。親しい先生への配慮には、CNSはどちらの場面においても、「積極的な約束 H-PF」(例：次回必ず手伝う)をMNSより多用し、MNSは依頼の場面において、「積極的な代案提示 H-PF」(私が他の人を探します)と「関係維持 H-PF」(例：本当はすごく行きたいのですが)をCNSより多用する傾向がある。以上のような差異によって、異文化間の誤解が生じることが容易に想像できる。

表5と表6をみると、ポライトネス・ストラテジーの使用頻度の差について、どちらの場面においても、「CNS親とCNS疎」、「MNS親とMNS疎」、「CNS親とMNS親」、「CNS疎とMNS疎」の4つのグループで有意差または有意傾向がある。言語の違い、および親疎関係の違いによって、CNSとMNSが用いるポライトネス・ストラテジーに差がみられる。CNSもMNSも親しい先生に対し、より先生と自分のポジティブ・フェイスを配慮し、親しくない先生に対し、より自分のネガティブ・フェイスを配慮するという傾向がみえる。また、CNSはMNSより親しい先生のポジティブ・フェイスに、配慮する傾向がある。CNSもMNSも親しい先生により配慮し、CNSはMNSよりさらに親しい先生に配慮する傾向が高いという結論にたどり着いた。MNSは親しいCNSの先生に断る時、より丁寧な言い方をし、「よんどころない理由 S/H-PF」、「積極的な約束 H-PF」などの意味公式を活用すれば、人間関係を築くことに役に立つと考えられる。

4.2 同輩の場合

地位が一緒である同輩に断りを入れる時、支配力が高い先生に断る時と比べて、丁寧さが下回ると常識的に考えられるが、状況3と4におけるポライトネス・ストラテジーの使用頻度が

状況1と2より明らかに低く、本研究結果からも裏付けられた。

依頼・勧誘どちらの場面においても、親疎関係がCNSの用いる意味公式使用に影響を及ぼすのに対して、MNSにはなかった。依頼場面において、親しい同輩に対し、CNSもMNSも「関係維持H-PF」(例：私も貸したいけど)を多く使い、勧誘場面においては、親しい同輩に対し、CNSは「不明確な理由S-NF」(例：疲れた)を多く使う。どちらの場面においても、親しい同輩に対し、CNSは「よんどころない理由S/H-PF」(例：昨日家族にお金を送ったから)と「詫びH-PF」の使用は少ない。同輩の場合において、CNSの意味公式は親疎関係に強く影響されるのに対し、MNSの意味公式は親疎関係にそれほど影響されない結果となる。つまり、CNSは親しい同輩より、親しくない同輩に対し、より配慮する傾向がある。

李(2013)によると、MNSの同輩からの依頼場面と勧誘場面では、親疎関係が大きな役割を果たしている。本研究結果と相反する結果は、データ収集法の差に起因する可能性がある。李(2013)は実際に学校で紙アンケートを配布したに対して本研究ではインターネットが用いられた。また、設問設定に関しても、「代案」(例：他の人に当たってください)や「明確だが個人的な理由S-PF」(例：私は本当に人とお金の貸し借りをするのが好きじゃない)のような質問が、李(2013)よりも本研究では少ない。更に、李(2013)の場面4の状況設定での断る理由は「カラオケがあまり好きじゃない」で、「明確だが個人的な理由」になるのに対し、本稿の場面4の断る理由は「疲れたので、家でご飯を食べたい」に改変した。本稿の多くの被験者は「疲れた」と答えたので、「不明確な理由S-NF」に分類した。

依頼場面において、親しい同輩に対し、CNSはMNSより「直接的な結論BOR」(例：行かない)を多く使い、「詫びH-PF」の使用は少ない。親しくない同輩に対し、CNSはMNSより「緩和した結論H-PF」(例：多分手伝えない)を多く使い、「よんどころない理由S/H-PF」を多く使う有意傾向がみられた。勧誘場面において、親しい同輩に対し、CNSはMNSより「消極的な約束S-NF」(例：また今度)を多く使い、親しくない同輩に対し、CNSはMNSより「よんどころない理由S/H-PF」と「消極的な約束S-NF」を多く使っていた。どちらの場面においても、「CNS疎」は「CNS親」と「MNS疎」より、「よんどころない理由S/H-PF」が有意に多く、または多い有意傾向があり、CNSはMNSより親しくない同輩に対する配慮度が高いことを示している。

表7と表8からみると、ポライトネス・ストラテジーの使用頻度の差について、「CNS親とCNS疎」と「CNS親とMNS親」のみ有意差または有意傾向がある。MNSのポライトネス・ストラテジー使用傾向は同輩の親疎関係に影響されない一方で、CNSは親しい同輩に対し、自分のネガティブ・フェイスをより配慮し、親しくない同輩に対し、同輩と自分のポジティブ・フェイスをより配慮する傾向がある。同輩の場合において、CNSとMNSの相違点は顕著である。CNSは親しい同輩への配慮が低く、親しくない同輩への配慮が高い。MNSは親疎関係にかかわらず、意味公式の使用にもポライトネス・ストラテジーの使用にも顕著な差がないという結論にたどり着いた。CNSはMNSの親しい同輩に断る時、「直接的な結論BOR」を避け、「詫びH-PF」を活用した方が、MNSはCNSの親しくない同輩に断る時、「よんどころない理由S/H-PF」を活用した方が、人間関係を円滑に進めるのに役に立つと思われる。

4.3 研究課題への回答

先生と同輩に断りを入れる際に、CNSとMNSにはどのような違いがあるのかをアンケート調査を元に分析した結果、(1)先生対象の場面でも同輩対象の場面でも、CNSとMNS間には違いがある、(2)「先生」と「同輩」の場面において、相手との「距離」による断りストラテジーにもCNSとMNS間には違いがあると判明した。CNSもMNSも親しい先生にはより配慮するが、CNSはMNSよりさらに親しい先生に配慮する傾向がある。CNSは親しい同輩への配慮が低く、親しくない同輩への配慮が高いのに対し、MNSは親疎関係にかかわらず配慮度にそれほど変化がないということが判明した。

4.4 今後の課題

本稿は、香港の言語環境と酷似するマカオの広東語母語話者を研究対象者とした。その理由として、歴史的な要因により、香港とマカオの広東語の使用人口の割合が一番高く、また香港とマカオの広東語は中国の標準語であるブトンファに影響されることが少ないからである。結果からみると、マカオのCNSは、中国出身のMNSに比べると、断りストラテジー使用様態において重なりと差異が明らかとなった。

今後は、広東省出身のCNSを研究対象にし、今回の研究結果の敷衍性を考えて行きたい。手法に関しても、本研究用のデータ収集は2020年の新型コロナウイルスが世界で猛威を振るっていた時期であり、インターネットを介したアンケートしか可能でなかった。先行研究との直接的な比較が可能となるように、実際に被験者に会って紙ベースでのアンケートを行う必要もある。また、分析手法に関して、本稿は李（2013）の意味公式分類を参考にしたが、蒙（2010）の提起した「呼称」や「賞賛」なども意味公式に追加した改良版も作成してみたい。被験者数を増やし、DCT調査に比べてより自然なデータが取れるロールプレイにデータ収集法の採用等課題はまだ山積している。

国際化が進んでいる時代に、CNSとMNSとの接触や文化交流もこれからさらに多くなると予想される。CNSとMNSはブトンファで交流することが一般的で、CNSの広東語からブトンファへの語用論の転移も予想できる。逆に、MNSもCNSの言語使用について理解することで、より人間関係がスムーズになるはずである。本稿が少しでも、CNSとMNSとのより良いコミュニケーションの一助になれば幸いである。

参考文献

- ヴラディミール・ジェガラッツ、マーサ・ベニンソン（2004）.「異文化間コミュニケーションにおける語用論的転移」『異文化理解の語用論』第4章、84-112. 研究社.
- ガブリエル・キャスパー（2004）.「語用論研究におけるデータ収集」『異文化理解の語用論』第6章、134-168. 研究社.
- ヘレン・スペンサー・オーティ（2004）.「ラポールマネジメント：分析のための枠組み」『異文化理解の語用論』第2章、10-55. 研究社.
- 生駒知子、志村明彦（1993）.「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー：「断り」という発話行為について」『日本語教育』79, 41-52.
- 伊藤恵美子（2003）.「マレー語母語話者のポライトネスの諸相—勧誘・依頼行為に対する返答を中心に」

- 日 期間の観点から」博士論文, 名古屋大学.
- 李海燕 (2013). 「「断り」表現の日中対照研究」博士論文, 東北大学.
- 蒙 韜 (2008). 「中国人日本語上級学習者の語用論的転移の一考察—依頼に対する断り表現のポライトネスの表し方から」『国際開発研究フォーラム』36, 241-254.
- 蒙 韜 (2010). 「日中断りにおけるポライトネス・ストラテジーの一考察—日本人会社員と中国人会社員の比較を通して」『異文化コミュニケーション研究』22, 1-28.
- 清水勇吉, 石田基広, 岸江信介 (2011). 「依頼に対する断り表現について」『言語文化研究』19, 147-161.
- ノフィア ハヤティ (2018). 「意味公式による日本語とスンダ語の「断り」談話の分析」『金沢大学人間社会学域経済学類社会言語学演習「論文集」』13, 1-16.
- ASMALI, M. (2013). Cross-cultural Comparison of Non-native Speakers' Refusal Strategies in English. *International Journal of English Language & Translation Studies*, 1, 3, 111-135.
- Beebe, L. M., Takahashi, T., & Uliss-Welts, R. (1990). Pragmatic Transfer in ESL Refusals. R.C. Scarcella, E. Anderson, & S.C. Krashen (Eds.), *Developing Communicative Competence in a Second Language*, 55-73. New York: Newbury House Publishers.
- Brown, P. and Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ethnologue (2019). Summary by language size. Retrieved from <https://www.ethnologue.com/statistics/summary-language-size-19>
- Farnia, M., & Wu, X. (2012). An intercultural communication study of Chinese and Malaysian University students' refusal to invitation. *International Journal of English Linguistics*, 2, 1, 162-176.
- Groves, J. M. (2010). Language or dialect, topolect or regiolect? A comparative study of language attitudes towards the status of Cantonese in Hong Kong. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 31, 6, 531-551.
- Ren, W. (2016). "Chinese females' date refusals in reality TV shows: Expressing involvement or independence?" *Discourse, Context & Media*, 13, b, 89-97.
- Yotsuya, H. (2018). "Politeness Strategies for Refusals in Interaction between Japanese and Westerners at Multinational Companies: From the Perspective of Politeness Theory" 『国際日本学論叢』15, 36-58.
- 卢兴翹・刘志平 (2008). 「从粤普词汇差异看地理环境因素的影响 (訳: 広東語とプトンファの語彙差から地理的環境要因を見る)」『国际汉学集刊』2, 264-279.
- 郑定欧 (1998). 「语言变异——香港粤语与广州粤语比较研究 (訳: 言語の変化——香港広東語と広州広東語の比較研究)」『中国語文 1998』1, 56-65.